

7月の最後の日曜日。イエス様が湖の上を歩かれた話の最後に、このような言葉が出てきました。

『イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たちは心の中で非常に驚いた。パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。』

イエス様が5つのパンと2匹の魚で、多くの人を養った話が、湖の上を歩かれた奇跡の、直前の出来事だったので、このような言葉が物語に補われたのでしょう。

この聖書の箇所を読むわたしたちも、もう一度、パンの出来事を理解しなおす必要がある、という目的があるからでしょうか。それまで、ずっと今年マルコによる福音書を読んでいたのに、8月に入って、4回の日曜日には、ヨハネによる福音書6章に出てくる「イエスは命のパン」という、イエス様が説教された箇所と、「永遠の命の言葉」の部分を読むように、聖書日課では福音書に組み込まれています。

2週前、8月の最初の日曜日の箇所で、印象に残ったのは、「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」というイエス様の批判でした。

イエス様が5千人にパンを食べさせた時、人々はイエス様を自分たちの王様にしようと押しかけてきます。イエス様はそれを察して、山に去られたのですが、その後も人々はイエス様の行かれるところへ先回りして、押しかけます。その時に言われたのがこの言葉でした。

ヨハネによる福音書の特色として、奇跡のことを「しるし」と呼びます。しるしは、目の前の物質、ここではパンにあたるのですが、それ以上の意味が含まれていることを指すことばです。

たとえば、誰かに大変世話になった時「これはお礼のしるしです。」と言って、お菓子とか本とかをプレゼントすることがあります。これを贈った側は、お菓子や本をあげたいから贈るのではなく、自分の感謝の気持ちを伝えたいので、それを贈り物に託すわけです。

ところが、受け取る側は、そんな贈り手の気持ちよりも、贈られた「お菓子とか本」そのものを喜んでしまうことがあるのです。

受け取る人々にとっては、食べさせてくれる人が自分の王様であり、もし食べ物がもらえないと「エジプトで奴隷だったときの方が良かった。」などと言い出すのです。

イエス様が群衆に向かって、「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」と言われたのも、そんな目先のことだけにとらわれている人々への批判だったのでしょう。

そして、先週は、「イエス様が命のパンである」ということが強調されていました。

ヨハネによる福音書は、1章の最初に「はじめに言があった」という言い方で、イエス様が「天から下ってきた言である」と教えています。その「言」という単語が、6章では「パン」に代わっているのですが、大切なことは、先週の旧約、申命記に出てきました。エジプトを脱出し、40年従ってきた群衆に対して、モーセが言った言葉です。

『8:2 あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。8:3 主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。』

わたしたちクリスチャンは、命のパンであるイエス様。元々は、神様の言であるイエス様の教えを素直に受け入れて、養われる、ということが大切だということです。先週の説教では、ユダヤ教のラビ、ハロルド・サムエル・クシュナーの書いた「なぜ私だけが苦しむのか」という本を引用し、その本によって多くの人が慰められたけど、それは「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」という、パウロの勧めの生き方につながるものでした。そしてそれはイエス様がベタニアのマルタとマリアの姉妹たちの涙に共感されたイエス様の生き方そのものだった、という話をしました。

聖餐式の前半は、神様の御言葉を読み、説教を聞くことでわたしたちは養われます。その、「御言葉によって養われること。」それが先週のテーマでした。

さて、それでは、3回目の、今日のテーマは何か、ということになりますが、これは聖餐式の後半、キリストの肉と血をいただくことの意味を考えることだと思います。今日の福音書の最初の部分を、本田哲郎というカトリックの神父さんが訳された文章で、53節から55節まで読んでみます。

『イエスは言った。「はっきり言っておく。人の子の生身を食らい、その血を飲むのでなければ、あなたたちは自分の内にいのちを得たことにはならない。わたしの生身に食らいつき、私の血を飲む人は、永遠のいのちを手にし、わたしも、終わりの日に、その人を復活させる。』

ここには、新共同訳では『食べる』と統一して訳しているけれど、元のギリシャ語は、全く別の、違った言葉が使われているので、『人の子の生身を食らい』という言葉と『私の生身に食らいつき』という言い方に使い分けています。『食らい』より『食らいつき』の方が生なましい気がします。

53節の『食べる』だけは、一般的な栄養補給のための『食べる』ということで、本田神父さんは『食らい』と訳していますが、その後の何度も出てくる『食べる』には、『よく噛んで食べる』という意味があって、本田神父さんはそれらをすべて『食らいつく』という言い方にして訳し分けています。

イエス様の肉を深く味わい、よく噛んで食べ、血を飲むということによって、わたしたちが永遠の命を得て、終わりの日に復活することになる、というわけです。

さて、どうでしょうか。私たちは、今日もいつものように、聖餐式でパンとぶどう酒をいただいているのですが、それが、本当に命や復活につながっている、と信じているのでしょうか。もし、信じていないなら、「あなたがたは、パンを食べて満腹しているだけで、何のしるしも見ていない。」とイエス様に批判されるのではないのでしょうか。

私たちは、「キリストの肉を食べる」ということと、「血を飲む」ということの意味を、はっきりと理解していなければなりません。それはイエス様の大きな犠牲によって私たちが活かされているという結論になると思います。

私は、『なぜ私だけが苦しむのか』という本を、よく人に差し上げるのですが、逆にある人から、『ライフ オブ パイ - トラと漂流した227日』という映画を紹介されたことがあります。早速取り寄せてそれを観ました。興味深い映画でした。これは動物園を手放し、動物たちと一緒にインドからカナダへ移住する一家の話です。

その中で、一家が乗った貨物船は大きな嵐で沈没し、パイという少年だけが救命ボートに乗れたのですが、その中には、いくらかの食糧や水と一緒に、動物が何頭か乗っていたのです。しかし、シマウマやオランウータン、ネズミ、ハイエナなどは死んでしまいます。この船の中にベンガルトラが居たので、だんだん弱肉強食の世界で、命が奪われていくのです。パイ少年自身も命の危険に遭遇するのですが、多くの生き物を殺して食べながら、トラにも食べられずに生き延びた話です。

この映画は、簡単には説明できません。そして観ていただいても、解説などに頼らなければ十分理解できません。しかし、わかることは、少年が他の動物を食べなければ生き長らえないため、仕方なしに動物に謝りながら食べている姿がわかります。そしてそれぞれの動物に付けられた名前や、主人公の少年が、成長して結婚した時、息子ができると、船の事故で死んでしまった兄の名前をその息子に付けたりしながら、命のやり取りの中で、相手の命をいただくことの神秘性などをあちこちに盛り込んでいることです。このようにして、私たちはお互いの命のやり取りをしながら、生きていることを学ぶのです。

イエス様は今日の聖書の後半で、『6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。』とされています。これは聖餐式の聖餐を受ける前に唱えることになっているところです。最近では省略されているのですが、ここに出てくる「食べる」というのは、「よくかんで食べる」という意味です。そしてイエス様の命を生きていることを知るのです。

私たちが、パンを食べる時、ふつうは満腹するために食べるのですが、私たちは聖餐をいただく時には、よくかんで、その意味を知っておく必要があるでしょう。私たちが養うパンが与えられるのは、どんな荒れ野を旅している時も、神様が共にいてくださる、というしるしなんだと気づくこと。そして、ただ食べるだけでなく、神様の口からでるひとつひとつの言葉を深く味わうこと。そして何より、私のために十字架にかかって死んでくださった、イエス様とひとつになり、イエス様と共に復活する、という望みを持って生活すること。それが、パンの出来事の意味なのです。

今日は普段とは違う、ユダヤ教の過ぎ越しのパンを持ってきました。深く味わって食べてください。